

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(25)〉

ミュンヘン市の幼保をつなぐ実践



—〇〇六歳の幼保一元的施設—

幼保小統合的保育者養成校の視察報告 —

浜口 順子

フランクフルト・アム・マイン中央駅から特急で三

時間余り、ミュンヘン中央駅に着いた。二〇〇八年三

月中旬。イースター直前に当たり、訪問先の保育施設

では、卵やウサギをテーマにした壁面構成や飾り付け

によく出合った。春の訪れが早かったのか、ソメイヨ

シノよりは小ぶりの桜やレンギョウの花が街角をささ

やかに彩っていた。

この旅の前半、フランクフルト市で、幼保小の保育

一元的施設であるKITAと、同市のユニークな陶

治 (Bildung) ネットワークプログラムの実態を視察

した。

これについては、大戸美也子氏が二〇〇八年十一、

十二月号の本誌ですでに報告されている。今回、私は

その後に訪問したミュンヘン市の、幼保一元的施設と

保育者養成機関についてお伝えしようと思う。

ミュンヘンは、ドイツ東南部に位置するバイエルン

州の州都で、ベルリン、ハンブルクに次ぐドイツ第三

の都市(人口一三五万人)として、南ドイツの政治・

経済・文化の中心である。現代的な高層ビル街と古い

町並みが共存するフランクフルトに比べ、ミュンヘン

は歴史と伝統を深く残した街という印象だった。治安も比較的よいそうである。ミュンヘン市郊外のハール町に住み、ミュンヘン市の公立幼稚園で先生をされているベルガー・有希子さんに今回通訳と案内をお願いしたが、母親として家族と暮らしていて「ミュンヘンはとても生活しやすい」と言われていた。

幼保一元的施設 (Koop) 「蝶ちよ園」

ミュンヘン中央駅から電車で二十分程、ラグヴィド駅に程近い静かな新興住宅地の中にある幼保一体型の施設 (Kooperationseinrichtung = 略称 Koop) 「蝶ちよ園」を訪問した。ここでは、生後九か月児〜五歳児の縦割り保育が実践されている。ちょうど十年前(一九九八年十二月)に設立された市営施設で、きれいなライトブルーの外壁にきらきらと何匹かの蝶の装飾が施され、清潔でやさしげな風情を醸しだしている。

バイエルン児童教育法に基づくミュンヘンの保育関連施設にはいろいろな種類がある。ドイツは州によつ

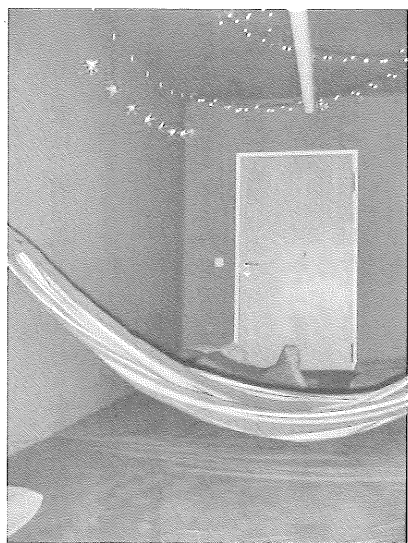
て政策の自立性が高く、教育制度も一律には語れない国だ。大戸氏のフランクフルト報告で「幼保小の保育一体化施設」として紹介されたKITAも、ベルリン、ハンブルグといった都市部では中心的な幼児教育施設であるが、ミュンヘンの施設種類一覧表にKITAではなく、同様の機能をもつ施設として、KITZ (Kinder Tages Zentrum) というものがある。蝶ちよ園の副園長ハウエル先生に何うと「KITAのことは知っている」とのこと。「ドイツの保育」と一括りに語れそうもないことを実感した。

蝶ちよ園は、満三歳までの子どもを日中保育する乳児保育所 (Kinderkrippe) と、三歳からの就学前の子どもへの教育・保育・養育を担う幼稚園 (Kindergarten) を一体化させた施設だという。「バイエルン陶冶」と呼ばれる保育の内容は「メディア」「創造性」「音楽・リズム」「身体表現」「自然とモノ」という五つの陶冶領域を中心に、発見的学び、生活、自立性を見据え、自由遊びを中心としつつ、多様なグ

ループ構成による設定保育、年間テーマ・季節行事を盛り込んだカリキュラムが展開されている。

蝶ちよ園には一三六人の子ども（そのうち生後九月～三歳まで三十六名）が在籍する。横長の二階建ての建物の左・右ウイングの一階と二階それぞれで、四つの「おうち」（縦割りグループ）に分かれて生活している（三十九人グループが二つ、三十八人と二十人が一つずつ）。移民の子どもは比較的少ない園だったが、フランクフルト同様、多数の移民の子どもを抱える園も少なくないという。

開所時間は、朝七時から夕方五時までの十時間である。八時～朝食・自由遊び。九時半～自分の「おうち」に集合して、朝の会・子ども会議。十時～設定・自由・庭遊び、フルーツ・おやつ。十二時～一緒に昼食。一時～お休みの時間（乳児は午睡の部屋へ。幼児中期は「ごろごろする部屋」でお話を聞く。就学前児は各階の一つの部屋へ。睡眠中の子どもは起こさないことが原則。二時～早帰りの子は降園。二時半



▲写真1：「ごろごろする部屋」

～自由遊び。迎えが来たら帰る。四時半～遅番保育者が残りの子どもの世話。

私は建物の右手一階の「おうち」を主に見学したが、定員三十八人の子どもに対して五人の担当保育者が付くグループだった。「おうち」には幾つかの部屋（保育室二つ、少し狭いが落ち着いた上下の空間を組み立て材で区切った部屋（午睡も可能）、アトリエ）があり、廊下にも幌布を掛けて落ち着いた空間をつくる工夫がなされ、広さは充分といえよう。

興味をもったのは、広さ三畳ぐらい、部屋いっぱい
にマットレスが敷かれ、薄暗く、天井や壁は星空のよ
うな雰囲気にしてある「ころころする部屋」だ（写
真1）。午睡もできるが、好きなときに入ってころこ
ろできる場所なのだそうだ（そのほかに、全「おうち
」が共同利用する工作室、体育室もある）。

これならば、〇〇五歳の子どもたちが縦割りで一
つのグループになっても、遊ぶ、食べる、寝るの生活
を、それぞれの子どもを大切にして組み合わせ
せることができそうである。実際二時間見学してい
間でも、一人ひとりの子どものやりたい遊びが多様な
空間で繰り広げられていた。たとえば、十時ごろ比較
的大きな子どもたちが軽食の準備に入ると、いつの間
にか（と感ずる程自然に）、〇〇一歳の子どもたちは
別の部屋で、補助の保育者とゆっくり過ごしていた。
保育者同士の連携がうまくいっているのである。超
（時間によって、年齢別の活動や「おうち」の枠を超
えたプログラムが計画されている）。

日本で一歳から五歳までの縦割り保育をする施設を
見たことはあるが、今回、〇歳からの縦割りを見て、予
想以上に生活が自然に流れているのに驚きを感じた。
朝の集まり「子ども会議」（写真2）では、点呼を
取ったり、今日は何曜日か、一日の予定や流れについ
て話し合ったりする。その間、小さな子どもは抱っこ
されていたり、車座の真ん中に出てきたりしているが、
一人ひとりの
子どものペー
スを見守る余
裕が保育者に
も子ども同士
にもあり、全
体に落ち着い
た時間だっ
た。

ゲームをし
たり、レール



▲写真2：朝の集まり「子ども会議」風景

遊びをしたり、廊下でゆったりと過ごしている子どももいる。小雨が降っていたのだが、外で遊びたい子どもはレインコートと長靴を履いて園庭の砂場で遊んでいた。

「おうち」を越えた年間プロジェクトとして、「私たちの町ミュンヘン」と題する掲示（市内で撮ってきた写真を貼った手作りの地図や、市の紋章である僧侶のマークをかたどった織物の作品など）が、園内全体の至る所で目を引いた。開市八五〇周年に当たる今年の特別な取り組みで、この準備のために一月に保育者たちが一日有給で合同研修をしたという。ミュンヘンが、ザルツブルク周辺で採れる塩の交易拠点として栄えたという史実に因んで、市内見学の際に子どもたちは塩を持っていき、町の所々に置いてきたのだそうだ（保護者も可能な範囲で一緒に参加したという）。小さな子どもも、塩を置くという身体的活動を通して、ただ話を聞くのとは違う経験を心に刻みつけたに違いない。身体的な学びを目指す陶冶 (Bildung) 学習の発

想であろう。

副園長と話していて、いわゆる「慣らし保育」、つまり入園時の適応にかかわる対応についての理論と方略がしっかりと位置付けられており、家庭との連携への配慮の厚さがうかがわれた。親と共に子どもが園に慣れていく期間と、親子が共に納得して離れていく期間とが段階的に考えられている。

「慣らし保育がうまくいくと、永続的な信頼関係のための基礎ができ、しっかりと安定した『自分は価値があるんだ』という気持ちの前提になる」

「大切なのは、両親が子どもを預けたいという、はっきりした自覚をもって子どもと別れることである」

（園のしおり）より／ベルガー・有希子訳

幼・保・小の統合的保育者養成

—ミュンヘン応用科学大学—

次に、ミュンヘン応用科学大学に二〇〇七年秋に新設されたばかりの幼年期陶冶教育学科 (Bildung und

Erziehung im Kindesalter) の主任教授レヒナー (Prof.

Dr. Helmut Lechner) 氏を訪ねた。私はその学科が、

ドイツで初めての「保育者 (社会的教育者) 養成」を目的とした高等教育機関 (二年間学士課程) であるう
えに、〇〇十二歳までという長いスパンの子どもを対
象とした一貫した保育者養成カリキュラムをもつこと
に関心をもった。

ドイツでは一般的に幼児教育と小学校の学童保育に
あたる部門は州の福祉関連省庁が統括しているが、
ミュンヘンのあるバイエルン州では唯一、伝統的に文
部省が管轄しているという特殊状況にも関係している
のであろう。

レヒナー氏によると、日本と同様、ドイツでも子育て
を難しいと感じる女性が増えており、また PISA
ショック (OECD が行う十五歳学習到達度調査で、
二〇〇一年ドイツは三十二か国中二十一位だった)

の影響もあり、社会的な教育格差を是正するために社
会で子育てをするという意識が高まってきているそう

である。

ドイツの学校は半日で終わるので、なお一層、学校以
外の時間の過ごし方が子どもの育つ環境において重要
であり、充実した教育プログラムが求められるように
なったと考えられる。学校の補習をするような保育施
設もあるが、むしろ、自らの身体を通じた発見的な学
びとしての陶冶 (Bildung) をじっくりやろうとする
傾向が強いという。

環境的な接続に対する研究は、ベルリンやミュンヘ
ンにおける幼児教育研究機関で重点的に研究されてお
り、知識注入や大人主導の狭義の教育 (Erziehung)
ではない、自己陶冶的な活動 (Bildung) が着目され
ている。子どもの情緒の基本的な安定を図り、攻撃性
などの問題を予防的に解決したいという意図も少な
からずあるようである。

(お茶の水女子大学 大学院 人間文化創成科学研究科

人間発達科学専攻 幼児教育・保育人間学)